

第13講 クセルクセスの背後にあるペルシア帝国膨張の論理

近代（現代）の価値観は過去に適用できるのか？

国境外への遠征、領土拡大を規制する内的要因は存在しない。

今日との相違：帝国主義が国際法に違反（ウェストファリア条約による国家主権尊重の原則）

外国の主権の侵犯、他国領への侵略・他国領の併合に対する道徳的・倫理的批判の欠如

繰り返される対外遠征と侵略：初代のキュロス以来の伝統

キュロス：メディア、リュディア、バビロニアを征服

カンビュセス：エジプトを併合

ダレイオス：内乱を平定した後スキュティアへの遠征

マケドニア国境まで拡大

クセルクセスのギリシア遠征：ペルシア王としての伝統を踏襲

クセルクセスが批判される理由

結局ギリシア遠征に失敗したから

批判はペルシア国内から出たものでない

批判の発信源はギリシア

ギリシアによるクセルクセス批判の理由

神が定めたアジアとヨーロッパの区分を越えて支配を拡大しようとした＝クセルクセスの傲慢（人間の分を越えた行為）

ヒュブリスに対する神は罰

ギリシア人の倫理≠ペルシア人の倫理

ギリシア人の倫理≠ペルシア人の倫理

アジアとヨーロッパの境界を越えて帝国の拡大の企て

クセルクセスが最初ではない

ダレイオス：ヨーロッパへの拡大を開始

スキュティア遠征そのものもヨーロッパへの進出の試み

副産物としてトラキアが帝国の宗主権編入

マラトン遠征：エーゲ海の島嶼部の藩属国化

アイスキュロスの論理の構造的矛盾：ダレイオスを持ち上げ、ク

セルクセスを死すべき定めにある人間の分を超えた傲慢と弾劾

クセルクセスと叔父アルタバノスとのギリシア遠征をめぐる論争の逸話

神が夢枕に現われて反対論を唱えるアルタバノスを罰しようとした＝ギリシア遠征はアナンケー（必然）

『イリアス』においてアガメムノンがトロイ勢に対して攻撃を仕掛けて大敗北を喫したという話と通じる

この逸話はギリシア起源¹。

ペルシアの正義：ペルシア側の Casus Belli

ペルシア人にとっての戦争

邪悪に対する正義の戦争

実例検証：イオニア反乱からペルシア戦争まで

1. イオニアの反乱

ペルシアの征服によって生じた結果²を覆そうとする行為

¹ Cf. *Ilias*, 2. 5-17. 761.

² Hdt. 1. 141, 143 (ミレトス) ; 161 (プリエネとマグネシア) ; 169. 1 (その他のイオニア諸都市) οἱ δ' ἄλλοι Ἴωνες πλὴν Μιλησίων διὰ μάχης μὲν ἀπίκοντο Ἀρπάγῳ κατὰ περ οἱ ἐκλιπόντες, καὶ ἄνδρες ἐγένοντο ἀγαθοὶ περὶ τῆς ἐωυτοῦ ἕκαστος μαχόμενοι, ἐσσωθέντες δὲ καὶ ἀλόντες ἔμενον κατὰ χώραν ἕκαστοι καὶ τὰ ἐπιτασσόμενα ἐπετέλεον. (ミレトス人をのぞくその他のイオニア人たちはまさにイオニアを立ち去った人々と同じようにハルパゴスと戦う羽目となり、それぞれ勇敢に立派に戦ったが、打ち破られ占領されたがそれぞれが国内に留まり命じられたことを履行するにいたったのである。) ; 169. 2 (島嶼部) Μιλήσιοι δέ, ὡς καὶ πρότερόν μοι ἔρηται, αὐτῶ Κύρῳ ὄρκιον ποιησάμενοι ἠσυχίην ἤγον. οὕτω δὴ τὸ δεύτερον Ἴωνίη ἐδεδούλωτο. ὡς δὲ τοὺς ἐν τῇ ἠπείρῳ Ἴωνας ἐχειρώσατο Ἀρπαγός, οἱ τὰς νήσους ἔχοντες Ἴωνες καταρρωδήσαντες ταῦτα σφέας αὐτοὺς ἔδοσαν Κύρῳ. (他方ミレトス人は、私が最初に探求したように、キュロス本人と協定を取り交わしていたので平

明らかに「反乱」

独立した国同士の「戦争」ではない³

ヘロドトス：ἀφίστημι という動詞や ἀπόστασις という名詞

ギリシア人の視点：τυράνων κατάπαυσις（僭主追放）⁴

ῥύσασθε ἐκ δουλοσύνης（隷属から救出する）⁵

εἶναι ἐλευθέροισι（自由であること）⁶

解放として宣伝

ペルシア側の視点：ギリシア人とは違った視点

ギリシア人とは異なった理由で正当化したと思われる。

ダレイオスの『ベヒストゥン碑文』⁷：

「アウラマズダーの御意によって」ダレイオスがパールサ

以下 23 もの諸地方の王となったことを高らかに告げる⁸

イオニアはヤウナという名前でスパルダ（サルディス）に
次いで九番目に挙げられている

ダレイオスに忠実な諸地方に対しては「厚く賞し」、不忠

和を保った。このようにしてイオニアは再度奴隷状態に陥ったのである。本土のイオニア人たちをハルパゴスが支配下に置いた時に、島嶼部を領するイオニア人たちはこれを恐れてキュロスに身を委ねたのであった。）

³ E.g. Hdt. 5. 35.2 : ἀρρωδέων δὲ τούτων ἕκαστα ἐβουλεύετο ἀπόστασιν: (以上のことをそれぞれ思い悩んで彼は離反を企てたのであった)。史料には ἀφίστημι (離反する、反逆する) という動詞や ἀπόστασις (離反、反逆) という名詞がイオニアの反乱に関して随所で用いられている。

⁴ Hdt. 5. 38. 2.

⁵ Hdt. 5. 49. 3.

⁶ Hdt. 6. 11. 2.

⁷ 本稿で引用するベヒストゥン碑文はすべて伊藤、一九七九年、「ダーラヤワウ一世のビーソトゥーン（大）碑文（古代ペルシア語版）」に依拠している。

⁸ 前掲碑文、第一欄（六）：伊藤、一九七九年、二二-三頁。

な諸地方に対しては「厳しく罰した」ことを指摘⁹

「アウラマズダーの御意によって」ダレイオスが行った

第五欄：ウーウジャ（エラム）の反乱をガウバルワ派遣によって鎮圧

エラムの離反は「不忠」

アウラマズダーがエラム人に「崇められなかった」と指摘¹⁰

エラムの反乱の鎮圧は「アウラマズダーの御意」によるエラムの反乱に関するダレイオスの宣言からの類推

イオニアの反乱をペルシアがどのように記録したかを推測

イオニアの反乱に関するペルシア側の資料は現存せず

イオニアの反乱は「不忠」

イオニア人たちが「アウラマズダーを崇めない」が故に鎮圧は正当

「アウラマズダーの御意」と「アウラマズダーの佑助」によってダレイオスが部下を派遣して反乱を起こした人々を「厳しく罰した」

2. ギリシア遠征

ヘロドトス：

アテーナイとエレクトリアによる軍のイオニア派遣

サルデイス攻撃に加担

ペルシア側の怒り¹¹：「王よ、アテーナイ人がしたることをお忘れ召さるな」と呼ばせたことはその怒りの強さを表す

怒りの背景：

アテーナイが盟約を反故にし、保護者たるペルシア王に危害を加えたこと

信義則の侵犯

⁹ 前掲碑文、第一欄、(八)：伊藤、一九七九年、二四頁。

¹⁰ 前掲碑文、第五欄、(七一)：伊藤、一九七九年、四八-九頁。

¹¹ Hdt. 5. 105. 1-2.

神への誓約を踏みにじる行為
ペルシアへの不法な戦争行為
クセルクセスの『ダイワ碑文』

史料状況：ペルシア側の評価と見解は伝えられていない
残されているのはアテーナイを中心とするギリシア側の
評価と見解のみクセルクセスの『ダイワ碑文』やギリシア
側の史料（ヘロドトスやクテシアスなど）から類推
邪悪に対する正義の回復と邪悪な行為に対する懲罰とい
うスタイルから公式声明を推定

ペルシア側の視点：

アテーナイの責任：協定の反故
ペルシア王の権威を否定
領土と人民に危害
神への神聖な誓いを侵犯

ギリシア遠征とは：

アテーナイに対する懲罰・報復、正義と秩序の回復¹²
ブリアンによるギリシア遠征に関するペルシア側の公式声明
の想定

自然な類推¹³

公式声明があるとなれば・・・

ギリシア遠征の失敗と領土の喪失を認めず
アウラマズダーの定めた秩序と正義を破壊したアテー
ナイ人と、これに協力した邪悪な人々（スパルタ人を含
めて）をクセルクセスがアウラマズダーの助けを得て打
ち破り、世界の秩序と正義を回復

¹² サルディスの破壊とそれに対してダレイオスが弓を放ってア
テーナイ人への報復を誓い召使にアテーナイ人を忘れるなど毎
日言わしめたという逸話が参考になる：Hdt. 5. 105. 1-2. ヘロドト
スは τίσασθαι（代価を払わせる）という言葉を用いている。

¹³ Briant, 1996, pp.558-9 (2002, p.542).

ギリシア遠征の失敗と領土の喪失を認めず

ディオ=クリュストモス：「ギリシアへの遠征の間に、クセルクセスはテルモピュライでラケダイモン人に対して勝利をおさめ、レオニダス王を殺害した。ついで彼はアテーナイを占領して荒廃させ、逃れ損ねた住民すべてを奴隷に売り飛ばし、これらの成功を収めた後、ギリシア人どもに税を課してアジアに戻った」¹⁴

『ダイワ碑文』：海辺に住むイオニア人や海の向こうの（イオニア人）を帝国の版図に含めている¹⁵

トゥキュディデスの証言：サルディスの総督がアテーナイ人の支配下にある諸都市に課せられる大王への税をペロポネソス戦争期に至っても負担し続けていた¹⁶

ペルシアが公式にはギリシア遠征の失敗と領土の喪失を認めていなかったことを示している¹⁷

¹⁴ Dio Chrysostomos, 11. 149.

¹⁵ 伊藤、一九七九年、一三八頁。

¹⁶ Thuc. 8. 5. 5.

¹⁷ トウキュディデスが伝えるペルシアとスパルタとの第一次同盟条約はペルシアが決して領土放棄を認めていたわけではなかったことを示している（Thuc. 8. 18. 1: ὀπόσιν χώραν καὶ πόλεις βασιλεὺς ἔχει καὶ οἱ πατέρες οἱ βασιλέως εἶχον, βασιλέως ἔστω:）。